

バイト先の奥さんは若い他人棒と、パイズリと騎乗位で不倫する

人妻

爆乳

オッパイ

騎乗位

浮気

馬乗り  
パイズリ

征服感

中出し

歳の差

adults only

カラー挿絵付きライトノベル作品

寝取り/  
寝取られ

※

——「んっ……はふう……年下の学生さんにやられっぱなしじゃ、人妻の沽券に関わるわ……こんどはわたしがリードしていいかしら……？」——

——「リードって……なにをするんです？」——

——「決まってるわ。騎乗位よ」——

——「えっ」——

——「あら、騎乗位を知らないの？」——

単にバイトに行っただけなのに、その美人の奥さんと、まさか、あんなに嬉し気持ちいい体験をするだなんて。

オレは夢にも思わなかったんだよ。

※

「仁本（にもと）さーん、お言いつけのお仕事終了です」

二〇二×年八月。

ソレは、日中はまだまだ暑い時期のことだった。

オレこと御前田（おまえだ）ユウは、地方のK大学に通う大学生。

奨学金をもらうだけでなく、アルバイトで生活費を稼いでいる。

その日のアルバイト先は、大学の学生課に求人がきていたところだった。

うちの大学の学生課では、主に地元企業の求人を受けていて、それを学生に斡旋している。スーパーや書店でゲットできる、フリーペーパーの求人誌よりも、時間の融通の利くアルバイトが充実していることから、オレはごと日のようにチェックしていて、その日の求人も見つけたわけだ。

仕事内容は、募集をかけた企業が指定する一般の家庭に行つて軽作業をすること。求人にはそう書いてあった。

確かに軽作業だったんだけど、量が思ったより多かつたよなあ。

朝一番で初めて、昼過ぎまでかかってしまった。

時刻は午後一時を過ぎている。

空には夏らしい真っ白な入道雲が広がっていて、中肉中背で汗っかきというわけでもないオレだけど、立ってるだけで汗が出てくる蒸し暑さ。三十度は軽く越えてるなこれは。とはいえ、虫刺され対策のジャージ姿で屋外作業していたオレだから、既にパンツまでぐっしよりなんだけど。

玄関でインターホンを押し、依頼主に呼びかけて間もなく、パタパタとスリッパの足音が聞こえてきた。やがて玄関が開いて顔を見せたのは、若々しい奥さんだ。

「暑い中ご苦労様ー。助かったわー」

人妻らしい、落ち着いたキレイな声で労う奥さんは、二十代に見える。

やや吊り目なのが、気が強くて身持ちの堅そうな面差しをいっそう美しく見せているが、長くサラサラした金髪を軽やかにびかせ、オツパイの大きいAV女優みたいな美白肌ナイスバディに、赤くピッチリしたトップと、太ももの半分もないマイクロミニのスカートを纏い、金ぴかの鎖のベルトをしている。

東京のオシヤレスポットにいるような、けれど、その中の誰よりも輝くであろう飛び抜けた美ギヤルルクだった。それでも、白くほっそりした左手の薬指から、夫への愛の象徴を銀色に光らせてるのが、普通のギヤルにはない色気なんだよな。

正直、趣味だとしても、旦那が仕事でいない家の中でギャル姿でいるのはどうなんだろうと思わなくもないが、誰かに見せなくても、単に好きなオシヤレをして楽しむという女性はいらそう。奥さんは、その口なんだろう。

美しくエロいのは、オレにとってありがたい。

オレは性欲を刺激してくるエロ美人さんは大好きなのだ。

そういう女とエロいことをしたいと、常々思ってる。

……思ってるだけで、実行したことはない童貞だけどさ。

もしものときには、とても責任を取りきれないから人妻にアタックしたことはない。でも大学で、あるいはバイト先で彼女を作ろうといういろいろ頑張ってはいるんだが、一向にモテないんだよなあ……。高校が男子校でなく共学だったら、今よりも女慣れしていて、彼女のひとりもできていたんだろうか……。

ギャルルックの美奥さんの姿から、とりとめもないことをふと思いつつ、オレはバイトらしく報告する。

「屋根のペンキ塗りも、書斎のデスクスタンドの設置と延長コードの作成も、除湿剤の取り替えなどの諸々も、ぜんぶ終わりました」

「いろいろ頼んだから大変だったでしょう」

「いえ。屋根のペンキ塗りは、パケットを使いつつ、ローラーパケに継ぎ柄をつけてモツプがけする感覚でラクにやりましたから。力の加減が難しくくて、ローラーの持ち手を一個壊しちゃいましたが……細かいところは、ハケを使ってしつかり塗ってます。使ったペンキは、市販品では最高クラスで、油性シリコンアクリルタイプです。十年はもつはずですよ。屋外の木部のペンキ塗りも、ローラーとハケを使ってしつかりやりました。屋根と木部で道具は分けましたので、色が混ざって汚くなってることはないです。

調光機能付きでアームの自由度が高いデスクスタンドの延長コードは、ご要望通りの長さで作りました。長すぎて邪魔ということはありません。プラグは百八十度可動のフリータイプにして、利便性を高めています。いろいろな状況でさせますよ。

除湿剤は詰め替え用のに取り替えました。リモコンの故障は質の悪い電池の液漏れが原因みたいです。もう使えませんが、互換性のあるものを、国内の一流メーカーの電池と一緒に調達しました。画鋏抜きも済んでます。指では取れない位に刺さったものでも、画鋏抜き用の道具を使えば簡単でした。ひとつ残らず外しましたので。それから……」

仕事のひとつひとつについて、ゆっくり説明していく。

どれも軽作業で、どうということもない雑用だけど、口にすると、ほんと多い。いろいろやったなあ、オレ。作業だけでなく、道具とかの調達もやったんだよな。もちろんお金

は全部、奥さんが出してくれたんだけど。足りなかったら言つてと言いつつ、万札が十枚も入った黒革の財布を、ポンと渡してきたのにはビビツたが。

オレは貧乏学生で、煩惱豊かなスケベ青年。聖人君子じゃない。  
正直、持ち逃げしたい衝動に駆られた。

普段は我慢してる値段が高くて美味しいものをたらふく食ったり、高級スープにでも繰り出したりしたいと思つたよ。

しかし当然ながら、んなことをしたら人生終わりという意識の方がずっと強かつた。

でも、他人のお金だったけど、ペンキやらその道具やらを、都合数万分も買い込んだのは気持ち良かったな。オレ、一度の買い物でこんなにお金を使ったことないんだよ。大学に入ったときに生活家電を揃えた際は、卒業生のお下がりを受取った具合だし。

奥さんはオレの報告を、いちいち頷いて聞いてくれた。

ぜんぶ聞き終えると、こう言つたんだ。

「仕事の邪魔にならないように確認させてもらったけど、よくやってくれたわね。流石に、業者の方が仕上がりはいいけれど、ずっと安く……仕事によっては半値以下でやってもらえたのを考えれば上出来よ」

奥さんの家は、この辺の住宅地の中でも大きい方で、しかも立派だ。

奥さん自身にもセレブの雰囲気はあるし、旦那はかなり稼いでいるんだろう。

なのに、この言いよう。所帯じみてるなあ。

お金で苦勞してるオレとしては、美人でも旦那の稼ぎを湯水のように使うセレブより、奥さんみたいに貧乏くさい、もとい、しっかりした人に親近感を持つ。

だからますます、美ギャル奥さんが魅力的に見えてきた。

ああ……もつと早く生まれて、出会えていれば。

「本当にご苦勞様。食事を用意したの。食べていって頂戴。さ、中へ」

「え、いいんですか？ それは嬉しいです……あ、でも……やっぱいいです」

「どうして？ 遠慮なんかしないでいいわ。折角、用意したんだから食べていきなさいよ。

若いくせに据え膳を食べないなんてどういうつもりなの？ 普段からいい物を食べてる風には見えないわよ？」

奥さんは唇を尖らせる。

ああ……今オレ、こんなに美人の奥さんに文句を言われちゃってるよ。

エムの趣味はないはずなのに、なんかグツとくるなあ。

失礼な軽い毒舌も心地いいぞ。

などという、出すわけにはいかない内心はおくびにも出さずに、オレは釈明する。

「この格好じゃ、家を汚しちやいますから」

オレは自分の身体を軽く撫でて見せた。

太陽が照りつける中、ペンキ塗りをしていただけに、ジャージのそこかしこにペンキがついている。熱中症対策で、スポーツドリンクやミネラル豊富な健康食品のお茶やジュースを飲みながら作業をしていたのも手伝って、仕事中は、タオルで拭いても拭いても汗が出てきた。冒頭でも言ったが、パンツまでぐっしよりだし、それだけに汗臭い。

他人様の家上がり込んでいい状態じゃないんだよ。

奥さんはオレのジャスチャーを目で追ったが、表情を変えなかった。

「もちろん、着替えてもらおうわ。だから、最初はお風呂場よ」

「え？」

「ぬるめに湧かしておいたの。服を洗濯している間は、旦那のを着てちょうだい。サッパリした後なら、食事もいっそう美味しいはずよ」

「ええ！ いたれりつくせりじゃないですか！ ただのバイトがそこまでしてもらおうわけには……」

「何回も言わせないで。若い学生が遠慮しないの。折角、用意した据え膳なのよ？ 断るなんて逆に失礼だわ」

「ちよつと、仁本さん……奥さんってば……！」

奥さんは気の強そうな面差し以上に、気が強くて強引な性格らしい。

オレの腕を掴むなり、力尽くで家に引っ張り込んだ。

いくら力尽くとはいえ、相手は女性。

本気で抵抗しようと思えば、その場に踏ん張ったり、手を払いのけるなりできた。

でも、それをした弾みで奥さんに怪我をさせたらマズイ。

なにより、美人に親切にされてるんだ。

これって、一種のモテ状態じゃないか？

すっげえ気持ちいい！

モテる快感に飢えていたオレが、それに逆らえるわけはない。

オレは奥さんの好意に甘え、状況に流されることにした。

そして……。

## 2

一時間後。

オレは奥さんの家のリビングにいた。

エアコンがガンガンに効いた広い部屋の、座り心地抜群の上等なソファ―に身体を沈めている。

「はあ……」

オレの口から締めりのない溜息が漏れる。

風呂で汗を流し、服は旦那さんではなく、汗だくになるのを見越して持ってきていた予備……安いというだけで買った、白地でネイティブから見たら意味不明の英文が青く入ったTシャツと、紺の短パンという出で立ちに着替え、店にも出せそうな奥さんの昼食に舌鼓を打ち、食後の甘めのコーヒ―までご馳走になっている。

寝床の安アパートでは味わえない極楽気分だった。

奥さんと旦那さんが入ってる風呂に入らせてもらい、旦那さんに振るわれている料理の腕をオレのために振るってもらい、旦那さんとくつろいでいるリビングでくつろがせてもらっているんだ。恐縮はしても、気持ち悪いわけがない。

もちろん、天にも昇る気持ちには、他に理由がある。

「昼間は仕事で疲れたでしょう。しばらくココで休んでなさい」  
隣に美ギャル奥さんがいることだ。



彼女は相変わらず、やたらピッチリしていて露出度の高い服装でいる。

お腹を満たして一息ついた今、彼女の人妻ボディは、一段と悩ましかった。

（ああ……隣の奥さん、甘いイイ匂いがする……こうしてみると、余計にオツパイがでかいぞ……まるでスイカじゃないか……どんな感触がするんだろ。旦那さんは、このチチを自由にできるんだよな。きつと、触りまくりの揉みまくりなんだろうなア。羨ましいぜ……

でも、その羨ましい人妻オツパイは今、オレの横で無防備でいるんだ）

などと、エロ美人大好き青年らしい、煩惱にまみれたことを思いながら、美味しいコーヒーに見合うやたら高そうなコーヒークップ片手に、チラチラ横を盗み見ている。

奥さんはストイックな香り漂う紅茶をすすりつつ、ファッション雑誌をめくっていた。

人妻オツパイに夢中のオレには、雑誌の内容はわからないが、彼女がオレの視線に気付いた様子がないのは分かる。

いくらオツパイに夢中でも、それだけは気を配っているんだよ。オレがしてることは、セクハラだもんな。バレたら怒られるだろうし、雇い主にクレームが行けば、バイト代なしになるかもしれない。大学にも話はいくだろう。

ヤバイ橋を渡ってるのはわかる。

でも、奥さんのオツパイには……赤くピッチリした、サテン生地らしいトップを纏う釣

り鐘チチには、自然と目が吸い寄せられるんだ。

くうっ……まったく魔性のチチだぜ。あー、触りたい。揉みまくりたい。

オッパイだけで、この美人奥さんをあえがせ、エロ顔とエロ声を露わにさせたい。  
……まずい。

性欲がエスカレートしてきた。

妙なことをしでかさないうちに退散した方がいいだろう。

オレは名残惜しいのを我慢して、奥さんのオッパイをチラチラ見るのをやめた。  
すると……。

「わたしのオッパイ、そんなに気になる？」

なんと奥さんが、雑誌を畳んでこちらを見てきた。

表情は硬く、どこか冬空を思い出させる。

「な、ななな、なんのの、ことととでしようううう」

うそだろ……バレてたのかよっ……！

オレはまともに動揺したが、誤魔化そうと声を絞り出した。

あうう……こんな言い方あるかよ。

これじゃ、はいそうですと云ってるも同じじゃないかつ。

オレってば、もう少ししつかりしてると思ってたけど、とんだ過信だったんだな。あーちくしょう……上手く盗み見を楽しんだと思っただのに……。

これで人生終わりか……終わらなくても、クソ面倒なことになるだろうなあ……。オレは今度は、諦めと絶望の深い溜息を吐く。

頭の中がグルグル回って、わけがわからなくなりかけていた。

ところが……。

「わたしのオツパイが気に入ったなら、触ってみる？」

「えっ」

奥さんの一言は、オレを正気に戻すのに十分な威力を持っていた。

オレは信じられない気分で、けれど、どこか昂揚した気持ちで確かめる。

「あの……オツパイ触ってみるって、言ったんですか？」

「そうよ」

「……マジで！」

「マジよ」

思わず叫んだオレに合わせた口調で肯定して、奥さんは悪戯っぽく笑った。

「仁本さんのオツパイ……完全合意で触らせてもらえるなら、喜んで！」

「あはは、現金ねえ。あたしにバレてたのが分かって、死にそうな顔をしていたのがウソみたいだわ。目がいやらしくギラギラしてる」

彼女は、こちらに身を寄せ、身をひねり、さあどうぞとばかりにオレと向き合う。

「それと、仁本さんなんて呼び方堅苦しいわ。わたしのことはリョウコと呼んで」

「いや、流石に名前呼びはマズイですよ。今日会ったばかりで、しかも、バイトと派遣先の奥さんというだけの間柄なんですから」

「じゃ、奥さんって呼びなさい。ふふ……学生さんに奥さんなんて呼ばれるとしたら、すごく刺激的だわ」

「まったくです」

奥さんの頬には赤みが差している。

もしかして、この奥さんもオレと同じで、エロいことが大好きなのかな。

人妻なのに。

夫以外にはエロいことをしてはマズイ、奥さんなのに。

そんなことはしないと、結婚式で大勢の前で誓ったはずの女性なのに。

オレは奥さんに親近感を覚えつつ、おずおずと手を伸ばした。

「それじゃ、失礼します……」

「ええ、どうぞ」

奥さんは背筋を反らし、胸元を余計に突き出した。

フルン♥ フルン♥ フルフル♥ フルツ♥ フル♥

AV女優でもそうそうお目にかかれない巨乳……いや、爆乳が目の前で色っぽく揺れた。

「すげえ……こんなに大きなオツパイに触れる日が来るだなんて……」

オレは据え膳に食らいついた。

さわ……さわわ……。

軽く指を開いた自然体の手のひらで、優しくゆっくりチチを撫で回す。

ガッツいて奥さんに嫌われたら、そこでこの至福時間は終了するだろう。

だから、はやる気持ちを抑えて、力は加えない。

こういうことは、こんなときのために読んでいたセックスのハウツー本やスケベ本で学  
習済みだ。大学生なのは伊達じゃない。スケベについても、博覧強記なんだよオレは。

「ふうん……エロオヤジみたいな目で見てたのに、意外と慎重なのね……んっ」

奥さんは、自分のオツパイを這い回るオレの両手を眺めながら、ときどき鼻を鳴らす。

くぐもってどこか甘い響きのあるソレが、なんとも艶めかしかった。

オレは今、人妻のオツパイを撫で回しちやっってるんだなア。

「バレてないと思ってたのに、思い切りバレてたんですね。恥ずかしいです」

「年上の人妻が、会ったばかりの学生に、オツパイを触らせてる方が恥ずかしいわよ」  
言葉とは裏腹に、ちよつとくすぐったそうに微笑する奥さん。

「奥さんのオツパイ、いい感触ですね」

「あなたのTシャツみたいに薄いとはいえ、服が間にあるのに分かるの？」

「……やっぱりこれ、ノーブラだったのか……その、あつたかくて、柔らかい感触はなんとなく伝わってきますよ。甘いイイ匂いもしますしね。香水か体臭かわかりませんが」

「へえ、よく味わってくれてるんだ。触らせ甲斐があるわね」

「そりゃ、生まれて初めて触るオツパイですもの。憧れのオツパイの魅力を貪らないなんてウソですよ」

「オツパイを見る目から感じられる以上にスケベそうね、あなた……んふ……初めてなら、しつかり楽しみなさいよね」

数分も撫でまくっていると、奥さんがときどき、口元を引き結ぶようになった。嫌悪してるといふよりも、不意に走る強い快感に耐えるみたいな感じだ。

「あふ……やだ……もう興奮してきたみたい……はあっ……」

奥さんのトップは、襟ぐりが広くて丸い肩が露出するデザインだ。

剥き出しの白い乳肌だけでなく、肩まで撫でてやると、奥さんの身体がビクツと震える。言葉通り、性的に昂ぶっている証拠だ。

オレってば、初めて触るオツパイを……それも年上の人妻を、感じさせてるぞ……！  
なんだか、猛烈に嬉しくなった。

こんな悦びは初めてだ。

いい成績を取ったときや、仕事をやり遂げたときの達成感とは違う、本能が満たされるみたいな濃密な快楽に、オレの胸の奥は沸いた。

「そろそろいいよな……えいつ……」

血湧き肉躍ると言うのがしっくりくる情動に身を委ね、手のひらに力を込める。

むに♡ むにち♡ むにむに♡ むにっ♡ もみみ♡

乳肌に何本かの指をゆっくり埋めたり、丸く膨らむ横乳や下乳を二、三本の指で挟んだり、全部の指を埋めて掴んだまま、手首で揺すぶったりして揉む。

「おおっ……大きくて形もエロい釣り鐘型爆乳だけじゃなく、揉み心地も最高だっ……  
柔らかいのに絶妙な反発力があって、指を食い込ませてるだけで蕩けちまう……はあ……  
はあ……この、手首にズッシリくる重さもどうだよ……！」

生まれて初めて揉むオツパイに感動と快楽を覚えながら、オレは思わず訊ねた。

「奥さん、サイズはいくらなんです？」

「んふっ……百十のGカップよ……あふ……」

「百十のG……！　メートルオーバーの爆乳なのかっ！　だとすると、片方だけでも重さはキロオーバーじゃないかっ……道理でッ」

具体的なデータを聞いて改めて思う。

こんな爆乳、AV女優でも滅多にいないぞ。

そこまで貴重なオツパイを、触りまくれるし、揉みまくれるだなんて……！

オレは夢中になって揉みまくる。

モミモミ♡　モミュ♡　モミツ♡　モミツ♡　モミミ♡

指を埋め、下からすくい上げながら摘まみ、根元からくびり、正面から鷺づかみ。

オツパイはオレの手の中で、奔放に卑猥に形を変える。

もしも、奥さんを不快にさせたならゲームオーバーになりかねない。

こんな爆乳を楽しむチャンスを得たというのに、不注意で不意にするのはバカらしい。

オレは、奥さんを不快にさせないよう、彼女の反応を見ながら行う。

気持ちよくしてあげるといふのも心がけた。

そうすれば、気をよくして、もっとすごいことをさせてくれるかも知れないだろ？

「はああ……いやらしい揉み方だわ……んん……感じちゃう………う……」  
強気な面差しによく合う奥さんの勝ち気な美声が、可愛く甲高く変わってきた。  
ちやんと感じてくれている証拠だ。

しかも、小さく身体をくねらせ、オツパイを微細に揺らすではないか。

メートルオーバーでキロオーバーの爆乳は、フルツ♥フルツ♥と波打ちながら、オレの手の中で、オレの思い通りに形を変え続けている。

くうっ……嬉しいぜえ……！

オツパイを好きにするのは肉体的に気持ちいいけど、感じてくれるのも精神的に気持ちいい。

オスとしての優越感と言うんだろうか。

日常では感じない、全身が細胞から沸き立つ悦びに、オレはしたたかに興奮する。

下半身……生殖器が急速に熱くなり、硬く膨らんでいくのがハッキリ分かった。

そのときだった。

「んん……あら……ウッフ……学生さんのココ、大きくなっちゃってるわね……んう」  
奥さんの目が光った。

それまで、オレにオツパイを揉まれながらソファアーに爪を立てていた奥さんの手が動く。

片方はなんと、オレの肩に回されて、グイッと抱き寄せた。

もう片方は、さらに信じられないことに、突き破らんばかりに勃起しているオレのチンポのてっぺんに触れたのだ。

さすさす♥ すりすり♥ さわさわさわ♥

奥さんの白くキレイな手のひらが……仕事を終えたオレに美味しい料理を振る舞ったり、美味しいコーヒーを淹れてくれたり……なにくれと世話を焼いてくれた手が、今度はチンポの世話をし始めたのだ。

「ううっ……奥さん……そ、それは……そんなことをされたら……！」

奥さんの手つきは、慣れたものだった。

勃起して敏感になっているチンポの性欲を刺激しつつ、確実に気持ちよくしてくる。

ビキッ……ビキキッ……バキッ……バキバキ……バキバキキッ……！

オレのチンポはあつという間にフルボツキ。

パンツと短パンは、今にもはち切れんばかりに膨れあがっている。

やばっ……。

このままだと射精しちゃう……ッ。

いくらなんでも早すぎるし、奥さんがそこまで許してるとは限らない。

手の中で射精したら、きつと、精液が染みて奥さんの手が汚れる。

そのとき、なにが起こるか分かったもんじゃやない……。

なんと言つても、オレは奥さんと出会ったばかり。

性格がよく分からないだけに、先の展開は読めない。

……改めて考えると、そんな間柄で、恋人同士か、風俗嬢と客みたいのに、エロってるんだよなオレたちは。すげえ。

と、ともかく手を打たないと。

オレはオツパイを揉む手つきを少し変えた。

先端に指を伸ばし、その根元ごと優しく挟んでみた。

もみつ♡ むにゆりっ♡ むに♡ むに♡ むにっ♡

「あああっ……！ んんっ、そんな不意打ち、反則だわあっ……はあ、はあ」  
乳輪と一緒に乳首を摘まんだわけだが、効果は抜群だった。

やったぞ……奥さんが気持ちよさそうに背筋を伸ばしたじゃないか。

声は一段と甘く蕩けてる。

男もだが、女にとって先っぽは敏感なのだ。

昂ぶらせた後に刺激してやると、かなり気持ちいいらしい。

敏感な場所だけに力加減が大切だが、取りあえずは、上手くいつてる。

オレは乳首を弄り倒すことにした。

「奥さん、ココがいいんですね？　こうされるとどうですか？」

摘まんで圧迫しては解放したり、指先で上からトントン叩いたり、根元から転がしたりすると、奥さんが両肩を強ばらせ、「あんっ」と可愛らしくあえぐ。

「はあっ、はあっ、ち、乳首いいわ……んんん、学生さんったら、上手なだから……あ  
ああ……わたし、乳首を弄られて、ああっ、こ、こんなに感じたのは初めて……んあっ」

奥さんの素直な感想に、オレの頭は真っ白になった。

こんなに感じたのは初めてだった？

なら、オレが一番、奥さんの乳首を気持ちよくさせた男ってことじゃないか。

この女性……女には夫という男がいるのに……。

これだけ美人なんだから、結婚する前に男と寝たことはあつたらうに……。

なのに、このオレが歴代一位だなんて……！

オレは俄然、やる気になった。

（このままイカせてやる……奥さんの乳首イキバージンを、このオレがもらうんだ……初体験の相手は一生忘れられないと言う……オレがその枠に収まってやる……乳首でイカせ

ることです！)

射精したらマズいなんてことは、頭から吹っ飛んでいた。

「奥さん、このまま乳首だけでイカせてあげます。乳首での初イキを、たっぷり楽しんでくださいね」

オレは正面からオツパイを軽く鷲づかみにしながら、人指し指を使った。

ゆっくり上下に動かして、指の腹で乳首を繰り返して弾く。

これが一番、奥さんが派手に背筋を仰げ反らせた愛撫だったからだ。

「はああっ……ああ……乳首をそんなに弾かれたら……んんんッ……！」

大成功。

奥さんは切羽詰まった声であえぎ始めた。

わし♥ がしっ♥

肩を抱いている手にも、チンポからオレの手の甲に移った手にも、しがみつくみたいな力がかかる。

精神的には、抱き合ってるも同然だったと思う。

奥さんは完全に、オレを求めてくれている。

オレにイカされたがってるんだ。

焦がれていたのに女に縁がなかったオレだけに、気絶しそうな多幸福感に襲われた。

(あく、可愛いなあ、この人妻……絶対にイカせて満足させてやる……！)

オレは愛欲を込めて指の動きを早めた。すると……。

「ンああああッ、い、イキそうなのに、そんなにされたら……ああ……信じられな  
い……わたし、乳首だけでイカされちゃう……ッ」

奥さんはしきりに仰け反る。

ぷりん♥ ぷりん♥ ぷりん♥ ぷりん♥ ぷりん♥

彼女が仰け反るのに合わせ、オレの手の中の爆乳が根元から弾んだ。

パンチングボールみたいに暴れながら、オレに乳首だけでイカされる瞬間に向かっている。

「奥さん、見ていてあげるから思う存分イッてくださいね。今日会ったばかりの大学生に、乳首だけでイカされる快楽を覚えるんですよ」

オレは同じ動作を、「奥さんイケイケ」と念じながら続ける。

彼女は確実に昂ぶっている。このまま続けければ、すぐに達するだろう。

オレの調べでは、愛撫は激しければいいわけでもないらしい。

肝心なのは、相手の好きな強さとリズムで愛撫すること。

そうしていれば、女はイッてくれるのだ。

「アア、ダメよお……人妻なのに……夫がいるのに……はああ……んん……他の男に……しかも、年下の大学生に乳首をイカされる気持ちよさを教わるだなんて……うあああ……年上として、人妻として格好がつかないわ……ンンンっ」

「じゃあ、イクのを我慢しますか？　ここで終わりにする？」

奥さんの頬は上気し、勝ち気な目の端はトロンと下がっている。

頭の中は、「イキたい」の四文字で埋まっているはずなのだ。

男だって、イク寸前……射精前には、出すことしか考えないんだから。

彼女の内心を見透かすオレは、意地悪っぽく訊ねた。

うゝむ……我ながら余裕あるな。

絶頂寸前で余裕のない人妻を見て、逆に落ち着いてるみたいだ。

そんなオレに奥さんは……。

「い、イヤっ……お願い、イかせて……乳首だけでイってみたいの……ンンン……旦那も教えてくれなかった快樂を……教えてちようだい……っ」

ウルウルした瞳で哀願してくる。

あゝ、もー、可愛いなあつ。

爆乳人妻にエロ声でおねだりされるって、オツパイを弄り倒すのに勝るとも劣らない快

感だぞ。本能が満たされるっていう感じだ。こんな快樂、日常では味わえない。

「わかりました。じゃあ、見ていてあげますから、我慢しないでイッてくださいね。イクまで、乳首を弾いてあげます。奥さんの大好きな愛撫をし続けると約束しますよ」

「はあああ……あ、ありがとう……はううう……ああつ、乳首イク……ンンン……人妻なのに、大学生に乳首だけでイカされるう……ンンンツツツ」

安心して、快感が一気に高まったんだろう。

奥さんは、気持ちよさそうに口元を引き結んだ後、こう叫んだ。

「乳首イクツ……♥ 乳首い、い、イクう♥ 乳首ツ、イクっ♥ イクくくくくく♥」

旦那さんがいるときは、一緒にくつろいでいるであろうリビングに、他の若い男の指で望んで乳首イキした不貞妻の嬌声が響いた。

彼女はメートルオーバーの爆乳をブルブル♥ って震えさせながら、目尻の下がりきつた顔で絶頂する。

オレのエロ知識によると、男と違い、女の絶頂は長引くそう。

初体験の相手として、末永く気持ちよくイカせなければ、男が廃るというもの。

だからオレは、奥さんが一度イッても愛撫をやめなかった。

しつこくねちつこく乳首を弾く。

それだけでは飽きられてしまうかも知れないので、緩急を付けたり、叩いたり引つ掻いたり摘まんだりという責めも織り交ぜる。

それに奥さんは……。

「はあああつ、イッてるときに、そんな風にされたら……ンンン……そんな、またイクツ♥ 学生さんの乳首責めがつ、いやらしすぎるせいでえ、またイクウ♥ ああ、信じられない……連続でイキまくるなんて、初めてよおお♥」

オツパイを揺らして大喜び。

「これ、イイ♥ あああ、もつとイカせて♥ ンンンっ♥ 乳首だけじゃなく、オツパイも揉んで♥ ちよつとくらいなら、荒っぽく揉んでいいからあ♥ 乳首で何回もイカされてるお陰で、切なく疼いてるのお♥ はああ♥ オツパイでもつとイカせてえ♥」

断る理由はない。

オレは夫がいる女性のオツパイを……本来なら、触れることすらできない極上爆乳を揉みまくり、乳首をねぶりまくる。

オツパイは昂ぶりながら一回り大きく膨らんでいた。

乳首は、ピツチリしたトップを突き破らん勢いでそそり立っている。

それらを本人の許可……哀願を受けて、弄り倒し、絶頂快樂を味わせた。

「あああ♥　　すごいいい♥　　軽作業をお願いしただけの学生バイトに……乳首絶頂処女を奪われちゃっただなんてえ♥　　……そういえば、オッパイだけでイッたこともないから、オッパイ絶頂処女も、奪われちゃったんだわ……♥　　はふうう……♥　　人妻のくせに、夫以外の若い男の手にバージンを捧げちゃったのね、わたしは……♥」

奥さんはイクのに慣れた様子で、けれど、時間を空けて何度もイキながら呟く。

その顔は、まるで恋する乙女だった。

目の前の男を受け入れきったメス顔だったんだよ。

しかも彼女は、こんなことすら言ってきたんだ。

「ごめんなさい……わたしだけイッちゃって……オチンチン、そんなにして切ないだろうに、わたしだけが気持ちよくなってしまった……はふう……ん……安心して……もちろん、あなたにも気持ちよくなってもらおうから……わたしのオッパイが好きなら………パイズリで精液出してみる……？」

彼女の法悦の涙で濡れた瞳は、オレの隆起した股間に注がれていた。

「はあああああつ……夫以外の男のチンポを……はあ……はあ……はあ……オッパイでくわえこんじやったあ……ッ」

奥さん……仁本リョウコさんの興奮と悦びが入り交じった声が、夫婦の寝室に木霊する。  
「はあ……はあ……お、オレ……本当に……ごくっ……奥さんの……他の男のオシッコの爆乳の谷間に、他人棒チンポをしっかり突っ込んでるよ……！」

オレもオレで、思わず叫んでしまった。

リビングで奥さんのオッパイをイカせまくった後、オレはなんと、夫婦の寝室に通されただ。

そこは、広くてよく整理整頓されていて、ベッドがやたら大きかった。

入ったときには既に、エアコンはガンガン効いていた。

奥さんは最初から、オレを招き入れるつもりだったのだ。

しかも、ベッドはひとつだった。

奥さんと旦那さんは、いつも同じベッドで寝ているらしい。

その神聖な場所に、奥さんは自分の意志で若い男を引っ張り込み、しかも、旦那だけが触れられるはずの爆乳で、他の男のチンポを包み込んでいるのだ。

奥さんは既に一糸まとわぬ姿になっている。

美白肌で、気の強そうな美貌、メートルオーバーにしてキロオーバーの爆乳の持ち主だが、お尻もひけをとらないサイズだった。クビレがハチみたいに細いものだから、裸になってもオツパイもお尻も余計に大きく見えた。マジでそそられるカラダなんだよ。

そのダイナマイトボディは、夫婦のベッドに仰向けに横たわり、オレのチンポを受け入れている。

いわゆる、馬乗りパイズリの体位だった。

もちろん、オレも既に裸だ。

オレは彼女の横乳を驚ぶかみにして、内側に向けて寄せ、谷間とチンポの密着感を上げている。奥さんはぜんぜん、嫌がってない。

「ああん……わたしのオツパイの中で……学生さんのチンポ、すごくビクビクしてる……わたしのオツパイが気持ちいいのね……はふう……」

嫌がるどころかノリノリだ。

胸の谷間から飛び出す亀頭を、潤んだ瞳で見つめ、熱い官能の吐息を浴びせている。

「気持ちいいですよ……くうっ……手で触っていたときもよかったけど、裸の乳肌とチンポを密着させると、ここまでイイだなんて……はあ……んっ……オンナのカラダは……奥さんのオツパイは、ほんとに最高ですよ……！」

「ウフフ……年下の若い子に褒めてもらっちゃった……しかもこの子は、わたしをオツパイだけでイカせられる性豪よ……そんな優秀なオトコに求められるだなんて、嬉しいわね」  
奥さんは屈託なく微笑する。

彼女の様子に、オレは気になっていたことを切り出した。

下手に喋ったら、奥さんとの最高の性行為が終わるんじゃないかと思って黙っていたことだけれど、この雰囲気なら多分、大丈夫だろう。

「あの、奥さん……」

「なあに？ 動きたいなら動いていいわよ、んふ、いつでも大歓迎だわ……はあ……」

「本当にいいんですか？ これって、浮気ですよ？」

「……いいのよ……わたしだって、遊びたいわ」

「奥さん……」

「最近、あの人ってば、仕事を理由にちっとも構ってくれないの……それでわたしは寂しくて……年齢を重ねるにつれ、ホルモンの分泌が活発になって、カラダがどうしようもなく疼くというのに、相談しても仕事仕事でケアしてくれない……」

「それで、オレですか……」

「初めは、そんなつもりはなかったの。仕事を依頼した会社から、大学生が来ると聞いた

から、ちよつと過激にオシヤレして、からかつて楽しもうつて気だったのに……。

やってきたあなたは、思いの外真面目で感じがよくて……しかも、わたしを猛烈にオンナとして見てくれた……それが嬉しくて……胸の奥がキュンとして……気付いたら、こんなことになつちやつてたのよ……」

「オレは……旦那さんの代わりだったんですね……」

「……考えてみれば、酷い話よね……自分の都合で、あなたを弄んだも同然だもの……こういうことは、遊びでしていいことではないわよね……」

「……いえ……」

「……え？」

「遊びでも大歓迎ですよ！」

「えっ、いいのっ！」

「オレ、奥さんみたいな美人と性行為できて超キモチいいんです！　奥さんがよかったら、もつと続けましょうよ！」

「ほんとにいいの？　わたし、夫を捨ててあなたに走るつもりはないわよ？　あなたは悪い人間じゃなさそうだけれど、お金持ちでもなさそうだし。それにまだ学生なのよね？　そんな男の子と一緒にするのは……ちよつと……」

「そんなの当たり前ですよ。オレが奥さんでも、同じ気持ちです」

「わかってくれるのね！」

腹を割って話してみると、奥さんにますます親近感を覚えた。

一体感で、オレの気分は高揚するばかり。だから、こんなことまで言ってしまう。

「奥さんが恋人とかにならなくても、刹那的に快楽を共有するだけで十分です。浮気相手になるだけでしあわせです！」

「浮気相手になるだけでしあわせなのね！」

「けど、オレも面倒はごめんです。そこところは、わかってもらえますか？」

「もちろんよ。わたしがあなたでも同じ気持ちだよ。絶対に迷惑はかけないわよ」

「なら、思い切り浮気しちゃいましょうか」

「う……ストレートに言われると罪悪感が刺激されるわね……胸が鈍く痛むわ……で、でも……我慢したらまた苦しむに違いないわ……だって、あの人は構ってくれないのだから……なら、浮気だって思い切りしちゃうわよ……！」

奥さんは両腕を外側へ投げ出し直した。

肘を九十度近くまで曲げ、後ろ手にシーツを掴む。

どう見ても、オツパイを捧げるポーズだった。

どうぞ存分に、わたしのオツパイであなたのチンポを扱ってくださいというジェスチャーだ。

「ああ……恥ずかしい……オツパイでオチンチンを扱くだなんて、あの人にもしたことはないのに……ましてや、こんないやらしいポーズなんて……」

「そうなんですかつ……いやあ、嬉しいなあ……オレってば、間男のくせに、奥さんのパイズリ処女も奪えたんですね。しかも、こういう羞恥ポーズの初めてまで。奥さんが……こんな立派な家を建てて暮らしている他の男のオンナが、どんどん自分のものになっている……横取りしているという感じがして、すごく興奮します！」

「はあああ……いやらしい表現だわ……はあ……はあ……で、でも……学生さんと浮気しちゃう淫乱人妻のわたしには、背筋がゾクゾクする快感フレーズよ……っ」

奥さんは、谷間から飛び出し顎に触れそうになっているオレのチンポの先をまじまじと見た。

「それにしても……ああ……なんて逞しいの……あなたのオチンチンは……」  
彼女の瞳は濡れている。

若い浮気相手のチンポに興奮しているのだ。

「日本人の平均は十三センチくらいですが、オレのは二回りは大きいですからね」

「ええ……旦那のよりも、二回りは大きいわ……しかも、皮が剥けていて、赤黒い亀頭が剥き出しだなんて……はああ……黒ずんだ竿全体が燃えているみたいに熱くてオス臭い……わたしのオツパイに、夫以外の男の熱と匂いが染みこんでくる……なんて背徳的なのかしら……」

「若い巨根を気に入ってもらえてよかったです。オチンチンなんて可愛い呼び方が似合わないこのデカチンで、奥さんの人妻オツパイを貪らせてもらいますね」

オレは奥さんのオツパイを横からしっかり押し込んだ。

彼女に体重をかけるわけにはいかないから、膝とスネをベッドについて、腰を浮かせている。だから、オツパイの谷間に対してやや斜めにインサートしてる具合だった。

ずり……ずりっ……ずりり……ずり……ずりりっ……

ゆっくり腰を使い始めるオレ。

「ふう……ふう……やっぱり、奥さんのオツパイは感触がいいですね。柔らかくてパツンパツンで、チンポを包んでるだけでイキそうだけど、ピストンすると、もつといい。一往復する度に、気持ちよすぎて気が遠くなります……はあ……はあ……」

亀頭を露出させながら、竿の根元からカリの裏までの範囲をオツパイで扱く。

元から熱かった肉棒は、ますます体温を上げていた。

オツパイの中でビクンビクンと跳ね回り、しかも一段と反り返る。

油断するとチンポが飛び出しそうなので、オツパイをしっかり寄せているのだけれど、  
圧迫感を強くすればするほど、摩擦快感が上昇した。

すげえ気持ちいいんだよ。

こんな快楽を知ってしまった今、利き手のオナニーでイケるんだろうか、オレは。

「はああ……んん……わたしのオツパイの中で……あふう……若いデカチンが暴れてるう  
……はふう……」

奥さんはオレの呼び方に合わせ、チンポをデカチンと言い始めた。

自分に同調させるだなんて、なんだか奥さんを、征服したみたいだぜ。

普段は別に、女を支配したいだなんて思っちゃいないオレだが、どう猛な部分は心の奥  
にあるんだなあ。

征服感と云えば、このシチュエーションにもゾクゾクする。

「ああ……すごい……わたし、夫にもさせたことのないこんな体位で……はああ……感じ  
ちやってる……んんっ……恥ずかしい声を出しながら、カラダを熱くさせちやってるわあ  
……」

夫しか触れられないはずの人妻おっぱい……しかも、類い希な爆乳を、チンポを扱いて

気持ちよく射精するための道具にしているこの状況。

大事なオツパイの谷間にチンポを突っ込んでピストンしつつ、奥さんの艶めかしいよがり声を聞き、その悶え顔を眺める。こんなもの、征服感満点じゃないか！

馬乗りパイズリ最高！

爆乳人妻マジ最高ツ！

びくっ……びくくっ……ちよろ……ちよろろ……びくんっ……とぶっ……。

オレの興奮が増したとき、しゃくりあげる風に弾むチンポの先から、軽いが甘い排泄快感と共に先走り汁が溢れた。

「あん……カウパーが出てきたわ……はああ……結構、白っぽい……すごく興奮してる証よね、これ……んっ……匂いもオス臭くて……ああ……ますます昂ぶっちゃう……ぺろっ……ぺろぺろ……」

なんと奥さんは、トロントとした目でピンク色の舌を伸ばし、首元へ流れてきたオレの先走りを舐めてくれた。

「んくっ……ふはあ……ちよつと塩辛いわあ……んん……旦那のカウパーより濃い……ぺろっ……コクン……先走りでコレなら、精液はもつと味が濃いのかしら……はああ」

奥さんは舐めるだけでなく、呑み込んでくれた。



しかも、一度だけじゃない。二度も三度もしてくれる。

すげえ！

なんだかほんとに奥さんを征服したみたいだつ。

旦那でもない男の体液……それも、排泄器官から出てきたものを喜んで舐めて飲むなんて、普通はしない。

一時とはいえ、身も心も捧げてる証じゃないのか？

征服感を一段と刺激されたオレのチンポは、一気に限界に達した。

腰の奥から、ドロドロの熱汗がこみ上げてくるのを感じながら、奥さんに告げる。

「はあっ、はあっ、奥さんがエロ過ぎるから、もう精液出ますっ！ このままオッパイで挟みながら出していいですかッ！」

本気なのが伝わらないはずのない、ラストスパートをかける。

すると彼女は、

「いいわよ、学生さん、ううん、ユウツ、わたしの百十センチGカップのオッパイの中で、いっぱい出して！ はーっ、はーっ、顔にかけていいわッ、んん、若い学生さんの精液の味を、わたしに教えてッ」

全面的にパイズリ狭射を肯定してくれるではないか。



「はあああああああ〜〜♡ 若い学生のっ、浮気相手のユウの精液、いっぱい出てるうっ♡ オツパイの中でビクンビクン暴れながら、わたしの顔に、んぷぷ、んぶっ、熱い精液をぶっかけてるうっ♡」

奥さんはうっとりと言を閉じていた。

逃げる素振りも、イヤな顔もせず、それどころか嬉しそうに、顔射を受け入れている。

「はああ♡ んん♡ ペろっ♡ ペろ♡ ああ、濃いわあ♡ 旦那のよりも、ユウの精液ずっと濃い♡ こんなに濃いのを出してもらえただなんて…♡ しかも、逞しいデカチンで…♡ ああん♡ 意識するとすごい快感っ♡ はああ、うそ、ンン、わたしもイク♡ 馬乗りパイズリされてるだけなのに、わたしもイツちやうう〜♡」

奥さんは背筋を反らし、全身を震えさせた。

マジかよ、馬乗りパイズリされてるだけで、イってるよ…!!

奥さんのオツパイは張り詰めていた。人妻とは思えない、キレイなピンク色をしている乳輪と乳首はビンビンに勃起し、気持ちよさそうに震えている。

これはマジだ…マジでイッてるぞ…っ。

馬乗りパイズリでイッてもらえると、征服感がまたも際立つ。

射精の快楽が上がり、しかも、もっと味わいたいという貪欲な気持ちも強くなる。



「ああ、奥さんは、リヨウコはほんとにエロい！ また出すぞリヨウコ！ 若いデカチンの精液を、旦那が働く昼間に、しかも夫婦の寝室で浴びてイク、ドスケベ妻のエロ可愛い顔にぶっかける！ オレの精液の感触を刻みつけるッ！」

オレはえんえんと射精した。

奥さんは「あん♥♥ 顔射されながらイク♥♥ オツパイの中でデカチンが暴れるのを感じながらイク♥♥」と可愛くよがりながら、一緒に果ててくれた。

はあ…：しあわせだぜ…：。

オレは生まれて初めて味わう至福を、長々と食った。

でも、この至福はまだ、入り口に過ぎなかったんだよ。

※体験版はここまでです。

続きは製品版でお楽しみください。

ご購入読どうもありがとうございます！

奥付

●制作●（二〇二〇年八月現在）

・文章他 木森山水道（別名義 きもりや）（サークル 夜山の休憩所）

ブログ <http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>

ツイッター <https://twitter.com/kimoriya2>

ノクターンノベルズ <http://syosetu.com/usernovel/list/>

ピクシブ <https://www.pixiv.net/novel/member.php>

ニジエ <http://nijie.info/members.php?id=987459>

・挿絵

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」(G・J?社)

「セックスライフ」(G・J?社)

公式サイト <http://www.teck.jp/gj/>

利用規約 <http://www.teck.co.jp/gj/products/sano/qa/qa.html>

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」のシリアル S/N:GJ0079908

●CM 雑誌読み切り編● 小生の商業作品にはこんなものがございます。

「魔王堕ち聖母マリナ 淫欲に寝取られる勇者たち」

挿絵 阿呆宮 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン百十号「悪堕ち」特集号（KTC社刊）

\*同誌は百九号より、電子書籍のみの販売となりました。

「地球警備隊ツイン・スター 不可逆のTS孕ませ陵辱」

挿絵 きばすけ 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン百七号「性転換孕ませ」特集号（KTC社刊）

「絶対無敗騎士キリイ・タイム」

挿絵 トモセシユンサク 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン百号「二次元エンド」特集号（KTC社刊）

\*百号記念号にして、内容も付録も大充実の永久保存版です！

●CM 単行本編● 小生の商業作品にはこんなものがございます。

「健昂優良ビッド・ガール 淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン」

挿絵 sue 先生      メディア 電子書籍専売品（KTC社刊）

「学園天使ツイン・セーフティ くらやリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦」

挿絵 洗面きぬ子 先生      メディア 電子書籍専売品（KTC社刊）

「元女騎士は新人スパイ 先輩エルフと挑むオークの館潜入ミッション」

挿絵 凧丘 先生      メディア 電子書籍専売品（KTC社刊）

「ツイン・アルステラ 調教洗脳で悪堕ちする正義のヒロイン」

挿絵 こうきくう 先生      メディア 単行本と電子書籍ともにKTC社刊）

以上はほんの一例です。通販サイト様、電子書籍ショップ様にて、

「木森山水道」では是非ご検索ください。



二次元好き向け雑誌、  
二次元ドリームマガジン110号  
（「悪堕ち」特集）に読み切り短編、  
「魔王堕ち聖母マリナ  
淫欲に寝取られる勇者たち」掲載！  
（絵 阿呆宮先生 小説 わたし）

キーワードは、  
「寝取り」、「寝取られ」、「NTR」、  
「悪堕ち」、「未亡人」、「ママ」、  
「幼馴染み」、「ツインテール」、  
「中出し」、「エロラノベ」etc.

おうちでいっぱい楽しんで♡

公式サイト（KTC社サイト内）  
[http://ktcom.jp/2d/2d\\_110](http://ktcom.jp/2d/2d_110)

キルタイムデジタルブレイク  
（出版社の直営店）

[http://ktcom.jp/shop/  
products/detail.php?  
product\\_id=3845](http://ktcom.jp/shop/products/detail.php?product_id=3845)

このイラストの作者  
わたしこと木森山水道



わたしってば、スポーツが好きすぎて  
**変身ヒロイン**になっちゃった!

えっ、この星からスポーツがなくなる?  
防ぐには、こんな**エロ競技**で  
勝たなくちゃいけないってウンでしょ!?

あちゃー……**エロ競技**で組んだ、  
**転校生**で**イケメン**で**ゴリマッチョ**で  
**アレ**がもの凄**いクラスメイト**に、  
ちょっと**メロメロ**になっちゃったら、  
**幼馴染みのアイツ**ったら、  
超イライラしてるわ!

いったいどうなっちゃうのよ!?

けんこうゆうりょう (挿絵: sue先生 小説: 木森山水道)

そんな、「**健昂優良ピビッド・ガール**  
**淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン**」  
は、電子書籍販売店さまで好評発売中♥

あなたもわたしとの**シコシコ運動**で、  
**キモチイイ汗**かこ♥

ピビッドガール

検索

ククク……  
青空の学園のグラウンドで、  
あの「健昂優良ビビッド・ガール」に  
こんなになっちゃうとく  
奉仕してもらえらるとは

体育会系の正義の変身ヒロインは  
悪との戦いやスポーツだけでなく、  
パイズリとチンポ舐めも、なかなか上手い  
ずっとして欲しいくらいに最高の気分だ

「健昂優良ビビッド・ガール  
淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン」  
電子書籍販売店さまで好評発売中!

ビビッドガール 検索 カチッ♡

ギンツッ!

れろ

ぺろっ

じゅすすっ

ずりゅりゅ

ギンツッ!

ずいゆ

じゅるっ

ビンツッー  
ビンツッー

うう……こんなに舐めたり吸ったりして、  
ローションを塗りたくったオツパイで、  
一生懸命ヌルヌル扱いたりもしてるのに、  
ぜんぜん倒れてくれないだなんて……  
このオチンチン凄すぎるう……

ああ……ドキドキする……  
アソコが熱く疼いて堪らない……  
○×も見てるけれど……  
こうなったら……もう……

### 没エロ競技「棒倒し」

男子の硬くそそり立つ「棒」を、  
女子がカラダを使って倒し、  
(射精させ)その数を競う。

体育祭実行委員が配る  
ローションなどのアイテム使用可。

色々なお店で販売中です！

夜のお供に是非どうぞ♡

学園天使ツイン・セーフティ

検索

by「学園天使ツイン・セーフティ  
～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～」

小説 木森山水道

挿絵 洗面きめ子 先生

出版社 KTC社

(二次元ドリームノベルズ) (電子書籍専売レーベル)

\*コメント、RT、いいねなどに感謝！

既におの方もこれからの方も、

ご購入ほんとうにありがとうございます！

画 木森山水道



ごころとくにかんしゃ！

まだまだ好評発売中っ♡

キルタイムデジタルブレイク

検索

by「学園天使ツイン・セーフティ  
～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～」

小説 木森山水道

挿絵 洗面きめ子 先生

出版社 KTC社

(二次元ドリームノベルズ)

(電子書籍専売レーベル)

\*コメント、RT、いいねなど、

どうもありがとうございます！

画 木森山水道



**新年明けましておめでとうございます！**

旧年中も応援ありがとうございました。  
本年もどうぞよろしくおねがいします。

2020年—お正月—木森山水道(きもりやますいどう)、きもりや



モデルは拙作  
「ツイン・アルステラ  
調教洗脳で悪堕ちする  
正義のヒロイン」  
(挿絵 こうきくう先生)の  
星振美月ちゃんです。

教師のわたしと女子校生の娘……  
母娘変身ヒロインがHな目にあう小説、

「変身母娘ビューティクラフト

墮としあう母娘は悪に染まる」は、好評発売中です♡  
わたしたちの痴態を是非、ご堪能くださいね♡

残暑お見舞い申し上げます♥

令和二年  
葉月